

ソー・ドホの新たな試み  
1999年5月25日-6月13日  
ギャラリーD

これまでソー・ドホは自己のアイデンティティをテーマに作品を制作してきたが、今回ICCにおいて発表されたビデオ・インスタレーション作品《SIGHT-SEEING》でも、その一貫した姿勢は変わらないと言える。特に、初めてビデオを使うことによって、韓国人である彼の視点と彼の遭遇する異国「日本」を映像として表現するという意欲的な制作が試みられた。

ソー・ドホは、この作品の制作のために特別に開発した2ウェイ・ビデオ・カメラ・システムを用い、映像を記録した。この二つのカメラは、一方は自分の見ている「対象」に、もう一方はその対象を見る自分、すなわち「主体」の表情に向けられ、これらを同時に録画する。展示室ではこの二つの映像がシンクロナイズしながら投影された。

まず観客が興味を惹かれるのは、典型的な日本観光や日本食の登場する、いかにも旅行者の撮りそうなホーム・ビデオ的な「対象」の映像だろう。ここにはアーティストが異国で遭遇した「出

来事」あるいは「物語」がある。しかしこの典型的なツーリストの映像が、もう一つの映像、すなわち、この「出来事」を体験している大写しになった作者の表情＝「主体」の映像と併置されるとき、大きな意味の変換がもたらされる。つまり、この作品を見る観客は、ツーリストの経験をただなぞるだけの、出来事を追体験するという視点から、より客観的な第三の視点へと移行を余儀なくされる。なぜなら併置された二つのスクリーンに経験の「対象」とその経験の当事者である「主体」を同時に見ることになるからである。

これはある意味での弁証法的な転換である。すなわち、観客は単なる観客であることができず、対象と主体を同時に認識しうる、第三のより高次元存在へ否応なしに転換あるいは止揚を迫られるのである。この構造のなかに取り込まれた観客には、もはや典型的な観光ビデオの物語の意味は希薄になるだろう。観客は表面の物語ではなく、この作品の背後に潜む「対象」



INTERCOMMUNICATION CENTER

ICCLレポート



クシュトフ・ウディチコ

クシュトフ・ウディチコは、「第4回ヒロシマ賞受賞記念展」を広島市現代美術館で立ち上げたその2日後、ICCを訪れた。

講演会の主題は、彼がポーランドを離れた後、1980年代以降のプロジェクトであった。ウディチコは、民主主義の哲学的本質をもつ物理的な場、あるいは舞台としてとらえたパブリック・スペースの定義から始めた。そこは、公共の場、開かれた広場として、誰の占有物でもなく、お互いの存在と政治的な権利を認め合う場である。しかし、そのような公共の場は、「存在していながらも存在していない」のである。彼はW・ベンヤミンを引きながら、都市が、勝利者の歴史をもつ記念碑的な場所であると言う。勝者は、自分自

クシュトフ・ウディチコ講演会「自作を語る」  
1999年7月27日  
ギャラリーD

と「主体」とそれを見つめる観客自身の「新たな主体」という「構造」を発見することになる。この構造の認知こそ、この作品にとって重要なものであると言えるのではあるまいか。さて《SIGHT-SEEING》が主体を見出す契機となる作品であるなら、もう一つの作品《UNI-FACE》は、匿名性のなかに溶解していくアイデンティティが表現されている。スクリーン・セーヴァーとして制作された映像の一つは、いくつもの顔が重なり合い、最後にはどここの誰でもない顔に合成される。重なり合う個の存在が、存在しない個のイメージをつくりあげる。ある意味では電子情報時代の個の危機と不安、ある

いは恐怖がそこに語られていると言えるかもしれない。現代美術のフィールドのなかで制作を続けてきたソー・ドホのコンセプチュアル・ワークと批評精神は、ときとしてメディア・アートが表現手段であるメディア・アートのものに新奇さに眩惑されているだけであるように見えるのに対して、重要な意味をもつだろう。ICCがメディア・アートを専らにするアーティストばかりに関心を払うわけではない理由もここにある。そしてより大きな領域からの自由な参入の場の提供こそ、ICCの存在理由の一つにほかならないと言えるであろう。  
[小松崎拓男]

《SIGHT-SEEING》のための  
2ウェイ・ビデオ・カメラ・システム



SIGHT-SEEING 1999



身の歴史を称え、敗者、弱者、社会の周縁にいる者を忘却させる。人々は勝者の塔（記念碑）をもつパブリック・スペースに集まるが、そこでは、誰もが言いたいことを言い、話したいことを話す権利をすでに奪われているのである。ウディチコは問いかける。「パブリック・スペースにおいて、アーティストはどのように機能するのか、街の中のアートとは、反（カウンター）アートなのか、民主主義のプロセスを助けようとするアートなのか。」ウディチコのパブリック・スペースにおけるアート・プロジェクトが目指している方向性は、大きく分けて二つある。一方は、このような勝者の歴史をもつ都市の記念碑性の解体を目指す「パブリック・プロジェクト」であり、他方は、記念碑的な都市、勝利者たちの都市における敗者、異邦人、周縁の人々が、「語る」ことを可能にする「道具」を提供する「インタロガティブ・デザイン（問いかけるデザイン）」で

ある。前者の記念碑や建物へのプロジェクション（投影）は、国境を越え、多くの国々で行なわれ、都市権力の批判として辛辣かつ多義的な意味をもっている。また、後者の「ホームレス・ヴィークル」「ポリスカー」「エイリアン・スタッフ」「ポルト・パロール」などのプロジェクトは、都市の周縁の人々や移民のために考案されたコミュニケーション・メディアである。この種のメディアによって、「都市の傷口」を目撃する彼らの視線が明らかにされ、そのメディアとの対話を通じて彼ら自身の存在は変化する。このとき新しいコミュニケーション形式をもつ都市のビジョンが生み出されるのだ。講演の最後に、8月7、8日に予定された広島原爆ドーム対岸へのパブリック・プロジェクトのプランが紹介された。護岸には「組んだ手」が投影され、川に設置されたラウド・スピーカーを通して、日本人の被爆者、在日朝鮮人の被爆者、被爆した親や祖父

母をもつ人々の語り流れ、彼らの体験が原爆ドームと重ねられる。ウディチコは、決して広島に恣意的に働きかけているのではなく、その場から学ぶことによって、新しい可能性が開かれることを望んでいる。また、「原爆資料館よりも、むしろこのプロジェクトにシヨックを受けた」という感想に対して、ウディチコは、資料館を否定するわけではない、と断わりながら、戦争の恐ろしさを伝えるには、戦争を体験していない人々にとって資料館や博物館では限界があり、アーティストを含めた多様な人々が戦争の恐ろしさを語っていかねばならず、広島は現在と過去が結びつく共通の遺産である、と答えた。

[上神田敬]